

文学の「読み方」はあるか

—— 田辺文学の教材化の試み ——

要旨

大学における文学教育はどのようなべきか。国文学科の教育内容と教育目標を模索し、カリキュラム再検討の議論を重ね、従来の「文学の読み方A」という一回生専門必修科目の内容を一新した。従来、開講している二回生以上の専門選択必修科目「古典作品講読」、「近代作品講読」を和らげただけのごとき科目名ではあるが、しかし、それらの科目とは目的と方法を異にする科目である。

すなわち、国文学科の二専攻（国文学、歴史文化専攻）と各コース（文学、語学、書道コース）の学びを具体的に学生に体験させることを目的とし、各専攻・各コースの教員五名が共通のテーマのもとに演習形式の授業をおこなうといったものである。

共通テーマには「田辺文学」を選び、樟蔭学園の知的財産である田辺聖子文学館を活用しつつ、自校教育の一環となることをも目論んだ。

本稿は、本学における独自の文学教育を模索した実践例の一報告である。

中 周子・北村英子
田 原 広 史・森 崑 隆 一
堀 裕

1 はじめに

大学における国文学科の存続意義が問われている。本学でも、度重なる改組の中で、平成十九年度より国文学科は二専攻となった。従来の国文学科の三コース（日本文学、日本語学、書道）を国文学専攻として、従来の日本文化史学科を歴史文化専攻としたのである。旧国文学科のカリキュラムと旧日本文化史学科のカリキュラムとをいかに融合させるか。改組に伴うカリキュラムの見直しと再編成を進める過程で、新国文学科における教育目標と教育内容を学生達に明確に周知するために、一つの科目として実施することは出来ないだろうかという意見が浮上した。国文学専攻の三コースと歴史文化専攻とを合わせた四つの学びをどのようにして一つの科目にまとめるか。何度も議論を重ねて、二専攻・各コースから五名の教員によるオムニバス形式による、一回生の専門必修科目、新「文学の読み方A」が誕生した。共通テーマには、国文学科の前身である樟蔭女子専門学校・国文科の卒業生である田辺聖子氏の人と仕事をとり上げることにした。在学生達が、田辺聖子氏という大先輩の人生と業績に関する理解と知識を深めることは、樟蔭の自校教育としても有意

義であろうと考えたからである。改組後の国文学科が、樟蔭学園の教育を如何に担うべきかを模索した実践例として報告する。

まず、本学の平成十九年度の講義要項（シラバス）を引用して授業の目標とテーマ、授業の概要、授業計画、評価について述べることから始めたい。

*授業の到達目標・テーマ……この授業の目的は、国文学科では何を学ぶのか―専攻・各コースではどのような研究をどのような方法で行うかを知ることである。教材として、本学国文学科の卒業生で作家の田辺聖子氏の作品を取り上げる。田辺作品を様々な角度から読むことを通して、それぞれの受講生に国文学科で学ぶことの意味を実感し追究してほしい。

*授業の概要……最初に授業の目的と方法についての説明を行う。次に五クラスに別れて、各コースの教員とともに田辺作品を読むことを通して、国文学科における学びと樟蔭の伝統「に対する理解を深め（総論）、田辺作品における「古典文学の継承」（日本文学コース）と「大阪弁の効果」（日本語学コース）を知り、田辺作品中の「名言」を書き（書道コース）、昭和という「時代背景」（歴史文化コース）を学ぶ。随時、田辺文学館の見学も行う。

*十五回の授業計画は次の通りである。

- 1～3 総論・国文学科の学び「樟蔭と田辺文学」
- 4～6 国文学専攻・文学コースの学び「古典文学と田辺作品」
- 7～9 国文学専攻・語学コースの学び「大阪弁と田辺作品」

10～12 国文学専攻・書道コースの学び「田辺作品の名言を書く」
13～15 歴史文化専攻の学び「昭和と田辺聖子」

*評価……出席・平常の意欲（二〇％）、授業中の発表・小テスト・レポート（八〇％）による。各教員の評価を総合して評価する。

シラバスには以上のように記したが、具体的には、五教員による授業形態と試験が様々であることから、最終的には、出席を二〇点満点に換算し、五教員の評価をおのおの一〇点（計五〇点満点）、期末のレポートを三〇点満点とした。

次に、各担当者により、十五回にわたって行われた具体的な授業内容及び実施状況を報告する。

2 各担当教員の授業報告

a、国文学科の学び「樟蔭と田辺文学」

担当 中 周子

①文学の読み方とは？

最初に、文学とは何か、文学の「読み方」はあるか、という問いかけを行った。今まで、本をどのように読んできたか。または、いかに読むかについて考えたことはあったか。ひとりりで「読む」とこと、大学の授業で「読む」とことの間には、どのような相違があるのか。教師やクラスの友人と共に「読む」とことの意味は何か等々。これらの問いを考えることを通して、本授業の目的を明確にしつつ、この授業が国文学科での学び全般に如何に関わるかを概説した。

文学とは言語によって人間をとりまく外界とその内界を表現するものである。文学を「読む」ことは、単に一つの作品の文字面を読むことではない。もちろん、読書が個人的な楽しみであってもよいが、しかし、文学は教えられるものではないという思い込みがありはしないか。

あらゆる作品は、いわば氷山の一角のようなものである。作家個人の感性のみならず、その生涯および、作家が生きた時代、社会をはじめ、作家が意識する、しないに関わらず、ありとあらゆる文化的背景が複雑に絡みあう相を、作品中に見出すことが出来る。従って、文学を読むことは、人の心を、人生を、時代を、歴史を、社会を、文化を読むことである。初回は、田辺文学という、樟蔭に縁の深い作家の作品を教材に、文学を「読む」という学びの目的を理解してもらうことに努めた。

② 樟蔭女専時代と「読書」

二番目のテーマは、田辺氏の生涯を知ってもらうことである。読書が大好きで、自らもノートに小説を書いて友人に回覧した女学生の頃から、樟蔭女専時代に国文学を学び、国語の教員を志望していた日々の出来事、卒業後、金物問屋で働きながらも小説を書き続けて芥川賞を受賞するまでを描いた自伝小説『しんこ細工の猿や雉』（集英社刊『田辺聖子文学全集』巻一所収、以下『全集』）を中心に取り上げた。参考資料として、田辺文学館ホームページの「楽天少女の歳月切符―田辺聖子の歩み―」および、「樟蔭ものがたり」（掲載するスペースがないのが残念であるが、平成十九年に本学で行われた北尾和信被服学科教授による写真資料の展示、創設以来の樟蔭の様子、諸行事や学生生活を写した貴重な資料であ

る）等の視覚教材、島崎今日子氏の評伝「夢見る勇氣」（『全集』別巻一所収）等を用いて、田辺聖子氏の人生と仕事についての理解を深めた。

作品に登場する主人公、受講生と同年代の田辺聖子氏の分身の物の見方を探りつつ、戦争体験や父親の死という過酷な逆境を生き抜いた力の源を探った。それは、如何なる逆境にあつても、「読書」によって、瞬時に美しくも楽しい「心の王国」（集英社刊『楽老抄』中の言葉）に自由に往き来することができる能力であつたとの結論に至った。

③ 田辺文学と樟蔭での学び

三番目のテーマは、田辺文学の代表作（すべて『全集』所収）を概観することである。ことに、『新源氏物語』をはじめとする古典文学への深い造詣に基づく「古典小説」とも呼ぶべき作品群、また『千すじの黒髪わが愛の与謝野晶子』『花衣ぬぐやまつわる……わが愛の杉田久女』『道頓堀の雨に別れて以来なり』等々のいわゆる「評伝物」と分類しうる作品群に注目した。これらは樟蔭女専（国文科）での学びが深く関わっていると考えられる。当時の女専の科目は、オーソドックスな大学の国文学科に匹敵するカリキュラムであり、田辺氏はいずれの科目でも優秀な成績を修めている。

田辺氏は、芥川賞はじめ数多くの賞を受賞しておられるが、文学賞の対象となった作品の多くは「評伝物」である。なかでも、『道頓堀の雨に別れて以来なり』は、ユーモアに溢れた洒落た文体で書かれているが、膨大な資料と格闘して完成された貴重な近代川柳史であり、「川柳作家・岸本水府とその時代」という副題が示す如く、れっきとした研究書の域

に達している。田辺文学を読み解くキーワードとして、従来から周知されている「女性の視点」「大阪文化への愛情」に加えて、「樟蔭の国文科での学び」をもあげることが出来るとの結論を得た。

田辺氏は、大の「読書」好きから、本を書く「作者」となり、さらに作品を書くことを通して、人生を楽しみ、あるいは作家への興味から研究的な読みを獲得し、その読みに基づいた「評伝物」をも開拓し、より多彩な作品群を生み出してゆくのである。

そのような田辺文学が要求する「読み」は多彩そのものである。人間の心模様とさまざまな感情、古典文学への憧憬、大阪文化の優しさと大阪弁のユーモア、アフォリズムの面白さ、「昭和」という時代——少女時代の回覧雑誌の創作に始まり、限りなく深化しつつ広がってゆく田辺文学の展開の相。その展開の相の中には、とりもなおさず、あらゆる文学の「読み方」が示唆されているのである。

b、国文学専攻・文学コースの学び「古典文学と田辺作品」

担当 北村英子

小説『むかし・あけぼの』（角川文庫、一九八六年）を教材として扱ったのは、古典文学として価値の高い女性作家の『枕草子』を、田辺聖子氏がただ文章を忠実に口語訳したものでなく、一旦全文を解体して、田辺流に平易な語り調の文体で、随筆を小説に構築しなおし、面白く楽しく読めるように改作してあるため、入学当初の一回生の教材にふさわしく、関心をもってくれると思ったからである。

平安時代の清少納言の人物は、明るくさわやかでそして才智のひらめきも相当なものだ。『枕草子』の作品の中には、清少納言の人物がにじみ出ている、随所に声を出して笑う場面がある。この『むかし・あけぼの』も田辺流に内容を、面白おかしく実に上手に書いてある。読み進めていくと、田辺氏を清少納言と錯覚する程、両作家は似通っていることを感ずる。

そこで、昔の清少納言と現代の清少納言こと、田辺聖子氏を重ねて、内容を楽しく読む指導に努めた。

冒頭から

まったく、則光ったら、なんでこうも私をイライラさせるのかしら。と切り出している文章には学生達は魅力を感じ、一斉に作品の中に引きずり込まれ、次を読みたいという心情になる。さすが今やトップに立つ日本の女流作家の筆力には、心打たれるものがある。

男尊女卑の平安の時代に清少納言はこんな気持で、夫則光に接していたのである。いわゆる当時からすれば、清少納言は近代女性として生きていたのである。そうした気持を汲んで、田辺氏が巻頭第一行から、かたつとさわやかにいやみなく、面白おかしく歯切れ良く書き出しているのは、読む人の関心をひき、心おどらせ、読書欲を駆り立てる実に上手な筆致である。そして、次々に繰り広げられる、女性の視点・女性の感覚・女性の心理等を楽しく読み味わっていった。受講生達は全員女子学生とあって、こつびどく男性をやっつける女性の勝気な場面を読むと、女性の視点、女性の心で書かれたこういった内容に共感していき顔が綻

び熱心に耳を傾け、目で活字を追ひ学んでいた。

大阪弁の語り調子で平易な文章の行間には、今体験することが出来ない、千年昔の宮廷貴族の生活・社会制度・年中行事・通過儀礼・交通手段・官職・服飾・建築・信仰・娯楽等、我々とは別世界の背景も描かれており、正しく解読するためにはアカデミズムの研究を必要とする場面もあるが、これも又、往時を想像しながら究明していく楽しさもあつたと思う。

授業時間がたった三時間しかない科目であり、作品全体を取り上げて授業することは不可能で、最初の部分しか学べなかつたが、続きを読みたいという気持は十分に沸き起つたものと思う。学生達は自分で『むかし・あけぼの』の本を購入して、「授業の続きを最後まで読んでみようと思う」と感想をよせている。

一回生の春期の授業として、平易な文体の中にも未知の世界が描かれた『むかし・あけぼの』という小説から、清少納言の才智と勝気な性格や鋭い感覚、女性の生き方、女性の視座で捉えた男性の風貌、男女の心理の機微、人生の楽しさ等を学ぶことにより、田辺氏の心おどる作品の素晴らしさを感じ取ってくれたことと思う。

千年昔の読みにくい古文の『枕草子』を、内容を変えることなく、親しみやすい筆致で書かれた『むかし・あけぼの』は、読んですつと燃焼出来る。古典を現代語によって改作するという創作の楽しさを味わってもらえたことと思う。この改作小説を教材に用いて、沢山の若人が、沢山の意義あることを学び、古典嫌いの学生が、「古典って面白い！」と興

味をもつてほしいと願うものである。

次は田辺流『源氏物語』を多くの学生に広めていきたいと思つている。

c、国文学専攻・語学コースの学び「大阪弁と田辺作品」

担当 田原広史

この分野の三回は、『大阪弁おもしろ草子』（講談社現代新書、一九八五年）を題材として授業をおこなつた。

この作品は、月刊誌に一年間連載した方言に関する十二のエッセイを新書にまとめたものであり、田辺氏が「大阪弁」について、自分の体験を交えつつ、解説をおこなつている。特徴として、単に方言の意味の説明にとどまらず、往年の大阪弁について、話し手と聞き手について、具体的な人物設定をあげつつ、会話文の形で提示してある。もちろん、すべてのエッセイをとりあげることとは不可能なので、ここでは、「はる — 大阪弁の敬語」というエッセイをとりあげた。

私の研究分野は社会言語学で、主として大阪方言を扱っている。当該分野においても、文学作品を用いて、ことばの研究をおこなうことはしばしばあるが、あくまでも「ことばの研究材料としての作品」というとらえ方になりがちで、いわゆる講読と呼ばれる分野における授業展開には当初から少なからず不安があつた。

そこで、授業方針としては、第一の観点として、講読の基礎に立ち返り、まず、文章の意味を確実にとらえることを旨とした。現代語で書かれていたとは言え、当今の学生にとってはなかなか難解な単語や表現も

多い。田辺氏らしく、古典が引用されている箇所も随所にみられる。ましてや、紹介されている大阪弁ということになると、すでに若者は耳にしたことすらない表現も多く、方言辞典を引いてもらいながら理解を促す必要があった。一回目の授業については、あらかじめ担当者が作成した、単語の意味や例文等を書いたノートを配付し、二回目以降はそれを参考にして、自分でノートを作ってくるように指示した。

意味を確実にとらえた上で、第二の観点として、文章展開の流れを把握し、さらに田辺氏の方言に対する考え方、大阪弁への深い愛情といったものを学生とともに考えていった。

この作業を通じて分かったことは、田辺氏が大阪弁を深く理解し、愛情をもちつつ、文学的にそれらを縦横無尽に使いこなしているということであるが、それは当たり前のこととして、加えて並外れた言語学的センスを兼ね備えているということであった。「ハル」という上方弁に特徴的な尊敬の助動詞について、語源に始まり、敬語的な位置づけ、一般的な尊敬の用法、それ以外の拡張的な用法、例外的な用法、東京と比較した敬語のとらえ方の違いといった、言語研究を生業とするものでさえ舌を巻くほどの、漏れのない詳細な記述が、さらりと簡潔になされている。これらは、決して言語学の専門書であれこれ勉強して書ける類のものではなく、田辺氏が本来持っている才能によるものである。

このことを発見した私の感動と興奮は、確実に学生へ伝わったはずであり、この時点でこの授業は成功したと確信した。

さらに、第三の観点として、右に述べた「ハル」の特徴を言語学的な

観点から分析し学生に示すことで、語学コースの学びというものを理解してもらい、無事授業を締めくくることができた。

初めてのこの授業は、学生にとって有意義なものだったと信じているが、それ以上に、私自身にとっても、このような研究の切り口があったのだ、ということに気づかされ、その意味で目から鱗が落ちた授業であった。これまでは、実際に方言を話している人が一番の研究材料であり、できるだけ多くの人に方言を尋ねて回ることが、唯一の使命だと信じて疑わなかったが、フィクションの世界のことが、実はより現実を照らし出していることもあるのだ、ということに気づかせてもらったような気がする。

d、国文学専攻・書道コースの学び「田辺作品の名言を書く」

担当 森篤隆一

①はじめに

「文学の読み方A」における書道コースの学びでは、数ある田辺作品の中で、とりわけユーモアや名言（アフォリズム）を中心に書かれたエッセイの中から、学生自身が一番心を打たれた名言や言葉を選び、それを筆に託して書いてみるという授業を行った。

田辺聖子氏の名言、その言葉を生み出した想いや、魂の叫びを学生一人一人の筆の動きを通して表現していこうというものである。そこには田辺さんの言葉（想い）と、それを書く学生の心と共感するものでなければならぬ。筆で書こうとする時、作者の気持なり心が動かなければ

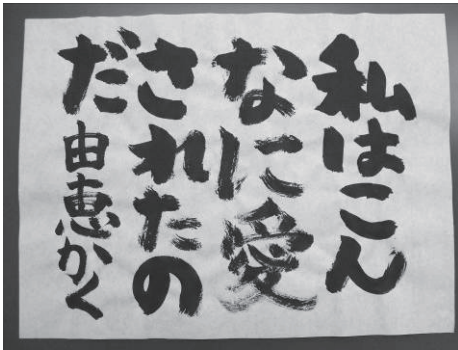
どうする事も出来ない。白い紙を前にして筆は動かないのである。「書」は文字を素材とする芸術であり、文字を書く事を通して、作者の心・想いを表現するものである。だからその「文字」は作者にとっては「特別なもの」、「心に感動を与えるもの」なのである。書く人の心が動いて初めて作品が書けるといえる。

② 調和体書法とは

調和体書とは漢字と仮名の書、所謂日本語の書かれた書を言う。高等学校の教科書では漢字仮名交りの書として、「表現」の第一に取り扱われている。要するに調和体書法とは、日本語の漢字と仮名とを調和よく書く事を意味する。漢字の太くて力強い線と、仮名の優しく柔かい線を如何に調和させるかが、書く上でのポイントとなる。

ここで調和体書に関して、中央書壇の動向に少し触れてみたいと思う。最近の状況は、この調和体書に特

に力が注がれ、二十一世紀の書の分野として大きくクローズアップされている。一般の人々から「絵や彫刻は解かるが、書は難しい。漢字も仮名も何が書いてあるか読めない」とよく言われる。このままでは書は一般大衆から見放されてしまい、専門家だけの世界になりかねない！このような危機感から、指導者達は今



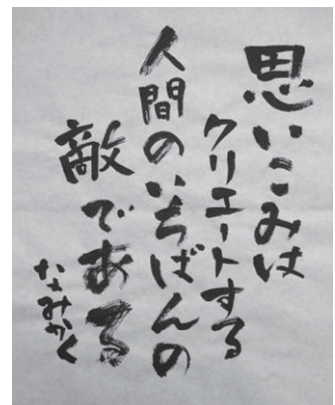
日の調和体書の分野を立ち上げ、その重要性を主張し始めたのである。我々日本人が日常使っている日本語、そのことばや、古くからの名言、名句を書きとして表現する事はごく当り前のことなのである。日本のことばを書

として表現された作品に親しみを感じない人はいない。今後の書壇において、調和体書の果たす役割は大きいと言わざるを得ないであろう。

③ 授業展開

授業回数が各グループ三回ずつという短時間で、作品を書き上げなければならぬ。本来ならば田辺作品を実際に読んで、その中から「名言・名句」を選んでもらうべきだが、時間の都合上、名言を集めたサイトを利用し、それをコピーして学生に配布する事になった。学生の中には小学校以来六年ぶりに筆を持つ者が、半数近くもいるグループもあり、少し驚いた。最初の一時間にプリントによる調和体書の説明、先人達の作品を紹介しながら、次の諸点に留意するように説明した。

- ・ 田辺さんの言葉のどこに感動したか。
- ・ その言葉をどのように表現したか。
- (力強く、優しく、明るく……等)
- ・ 運筆、墨色をどうするか。



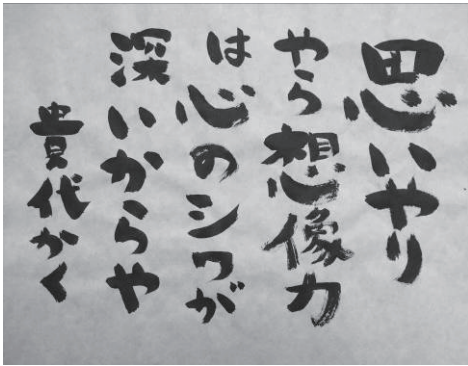
・半紙にどのようにまとめるか。

これらは、名言を書く上での重要なポイントとなるものである。

名言の数々を記したプリントを見ながら、各自が選んだ名言を順次書き始める事になった。筆、紙、硯、墨：等一切のものは、こちらで準備したもので、全て同じ条件の元での揮毫になった。筆の持ち方、姿勢が少し気になる学生には注意したものの、あまり細部にわたっては気に留めないで、要は田辺さんの名言に感動した気持をそのまま素直に筆に託する事を通して、楽しく書に親んでもらうことを目的とした。

同じ「ことば」を三時間も書くとなると飽きるし、感動もなくなるので、毎時間違う「ことば」を書く事により、いつも新しい気持で取り組むことが出来たので良かったと思っている。

学生達は、最初のうちは（一、二時間目）少し戸惑いもあったようだが、最後の三時間目には、本当に楽しく、思い思いに筆を駆使して傑作を生み出してくれた。ある学生は最後の時間に、「本当に楽しかった。もう終わり？もつと書きたかった」と言ってくれた。従来の書道コースの授業とは全く異なった内容と方法の授業ではあったが、この授業を担当できて良かったと思う。



e、歴史文化専攻の学び「昭和と田辺聖子」

担当 堀裕

田辺聖子氏の作品を歴史的な視点から考える素材の一つとして、大阪大空襲を取り上げることとした。

一九四五（昭和二〇）年、田辺氏は、大阪福島の田辺写真館を住まいとし、勤労働員のための工場が建設されていた樟蔭女子専門学校に通っていた。三月から本格化した数々の空襲のなかでも、田辺氏の心に刻み込まれたのは、田辺写真館が焼けた、六月一日の第二次大阪大空襲である。その様子は、田辺氏の作品にしばしば登場する。いま、紙幅の関係で、詳細は記さないが、『楽天少女通りますー私の履歴書ー』（ハルキ文庫、二〇〇一年、原著一九九八年）を例示しておく。

さて、授業で扱ったテーマが、指導する教員にとり、専門分野と異なるものとなったこともあり、どのような方法が教育的に有効なのか、思考錯誤を繰り返しつつ、実験的な授業展開を計画した。また、一年生の春期の授業であることも意識し、学生同士の交流が生まれる（仕掛け）を試みた。

一つの班は、基本的に三回の授業であったが、一回目はすべての班で同じ内容の授業を行った。『田辺写真館を見た』昭和『（文芸春秋、二〇〇五年）最終章「戦火、熄む」を受講生が交替で朗読し、当時の概況を理解することを目的とした。次に、田辺氏と同じ一九二八（昭和三）年生まれの手塚治虫氏も、大阪大空襲を経験している点に注目した。「紙の砦」（『手塚治虫「戦争漫画」傑作選』祥伝社、二〇〇七年、初出一九

七四年)は、手塚氏が、大阪大空襲を描いた作品である。これも受講生が読みあげることとした。二回目以降は各班によって異なる。以下、各班毎の授業概要を記す。

〔一番目の班〕「田辺氏と手塚氏の作品の相違を考えること」を、課題として事前に提示し、二回目の授業で各自が報告・討論を行った。討論を行う中で、男性と女性、都市と農漁村、戦争を経験した年齢、「日本人」であったか否か、経済力の差などによって、同じ「戦争」であっても見えているものが違うのではないか、という点を徐々に浮き彫りにすることができた。また漫画と対置することで、文字の作品とは何かを理解しようとする学生もいた。

〔二番目の班〕二回目の授業では、一番目の班と同様の課題を提示し、報告・討論を実施した。三回目の授業では、大阪大空襲の簡単な調査か、学生の知り合いの方からの戦争体験の聞き取りを課題として提示した。二人の作品からだけでは理解できなかった大阪大空襲の全貌や、身近な方から聞く戦争体験に、ある程度実感をもって作品理解、戦争理解が進んだように思われる。

〔三番目の班〕土日を利用し、二班に分かれて現地見学の授業を実施した。一つ目の班は、JR大阪福島駅に集合し、田辺写真館があったあたり(下図)や、田辺氏がかつて過ごした福島島



考える機会を得た。帰りには森之宮神社に戦闘機による弾痕が残っている伝えられる狛犬の台座を参加者全員で見学することができた。後日各自に与えたテーマに沿ってレポートの提出を求めた。

〔四番目の班〕大阪大空襲の被害を具体的に知るために、地図に被害地域を色塗りしていくとともに、田辺氏が六月一日の大阪大空襲の時にどのような経路で帰宅したのかを示した。地図は、地図資料編纂委員会編『昭和前期 日本都市地図集成』(柏書房、一九八六年)が収録する一万分の一の大阪市の都市地図をベースとした。そこに『新修大阪市史』第七卷(一九九四年)および付属の空襲被害を示した地図を参考に、第一次と第二次の大阪大空襲の罹災地域を色分けして示した(下図)。さらに、田辺写真館や大阪上福島天満宮、樟蔭女子専門学校などを地図上に示すとともに、田辺氏の帰宅経路も示し



た(下図)。

「五番目の班」四番目の班と同様に、地図作成を行うとともに、地図の解説をする学生の様子や、『田辺写真館が見た』昭和『(文芸春秋、二〇〇五年)の最終章「戦火、熄む」を学生が朗読する様子をビデオに記録し、地図を理解する助けとなる映像資料を作成した。文化遺産を活用する方法の習得を目的とした。

以上が授業の概要である。振り返ってみるに、授業内容をブラッシュアップする必要は多々あることはいうまでもない。その一方で、歴史的な視点から、田辺氏の作品を通して、大阪大空襲とは何か、アジア太平洋戦争とは何であったのかを理解することには、一定程度成功したのではないだろうか。また、作業や現地見学などの〈仕掛け〉によって、班内の学生間の交流が活発化していたことは明らかである。受講生のこれからの学生生活が、より多様な人的交流の中で行われるようになるきっかけとなることを期待している。

3 学生の感想及び成績状況

a では、授業終了後におこなった授業アンケートの結果を紹介する。



またbでは、成績の状況について簡単に述べる。

a、学生の感想

- ・この授業を受講することで、田辺聖子さんの作品をもっと読んでみたいと感じた。(二人)
- ・この授業を受講するまでは、田辺聖子さんの本を一冊も読むことがなかったが、読みたいと思える本に出会えてよかった。(五人)
- ・田辺聖子さんとその作品に興味を持つことが出来た。(一人)
- ・先輩である田辺聖子さんの作品を読み、学ぶことは樟蔭生として必要で、有意義な時間を過ごせた。(五人)
- ・五人の先生の授業を受講して田辺聖子さんの様々な作品に少しずつが触れることが出来てよかった。(五人)
- ・五人の先生にいろいろなことを楽しく学べてとてもよかった。(七人)
- ・一人の先生だけだとこんなに違った視点から作品を見ることは出来ず、とても勉強になった。(二人)
- ・とてもわかりやすい楽しい授業で、また受けたい。(七人)
- ・先生の話がわかりやすかった。(二人)
- ・先生が一人ひとりの意見を聞いてくださるのでみんなの考えていることがわかり、自分の考えと比較できてとても楽しかった。(四人)
- ・話を読む度、授業の最後にまとめプリントを書いたおかげで内容が読み取りやすくなった。(一人)
- ・五人の先生に三週間教わるので、先生を覚える良い機会だった。(一人)
- ・一人の先生の授業時間が三回と少ないので、話の内容は、ほんの一部

しか読めなかったのが残念。(六人)

・授業回数が少なく、繰り返しが多く先に進めなかった。(二人)

・先生が違うのに選ばれた田辺聖子さんの作品が同じだった。(二人)

・変則的な授業に戸惑った。(二人)

・作品だけで作者を判断するのではなく、作者の生い立ちを調べた上で作品に親しむことの大切さを実感した。(五人)

・語句のテストは、作品を理解するのにとても役立つ。(四人)

・古典の面白さが少しわかった。(三人)

・言葉の細かい意味など詳しく教えてくれてすごくわかりやすく古典に興味を持った。(七人)

・関西弁の授業は、難しかったが、とても興味深いことが多く自分の知らないことをたくさん学べ、とても楽しかった。(二人)

・大阪弁について詳しく知ることができ、おもしろかった。(二人)

・地方出身なので大阪の言葉を知ることができ、自分の県を大切にしているのだと感じた。(二人)

・普段の書道のような緊張感を持たずに自由に文字が書けたので、今までで一番書道を楽しむことが出来た。(三九人)

・書き方に指定がないので悩み試行錯誤をして作品が出来た時に来る感動は、書道の授業の特徴だと思う。(二四人)

・書道をあまりやっていなかったもので、もう少し書き方のアドバイスが欲しかった。(一人)

・どんな字であっても何も言われない。(二人)

・戦争の悲惨さを改めて感じることが出来、戦争を詳しく知る良い機会だった。(二五人)

・大阪大空襲の時の田辺さんの歩いた道のりを自分たちで作った地図上で見るという体験は、文字で見るより実感がわきわかりやすかった。(二人)

・みんなで何かを作るという作業は、親交も深めることができ、とても楽しかった。(一人)

・聞いているだけの授業ではなく、書いたり、作ったり、討論したりとても楽しい授業だった。(三人)

b、成績状況

S (九〇点以上) 一三名 (二五.九%)

A (八〇点以上九〇点未満) 二九名 (三五.四%)

B (七〇点以上八〇点未満) 二四名 (二九.三%)

C (六〇点以上七〇点未満) 一〇名 (一二.二%)

D (六〇点未満) 六名 (七.三%)

採点の方法は、出席点二〇点、レポート課題三〇点、教員の評価点各一〇点計五〇点を合計して算出した。レポート課題については、「田辺聖子の作品を一つとりあげ、感想を八百字程度にまとめよ」というものがあった。

成績状況については、平均点が七六.三点と他の科目と比べ高いが、一回生の入門的科目であることから、一定のレベルをクリアできたかどうかで判断したためである。

4 おわりに

以上が、田辺文学を共通教材として二専攻各コースの五名の教員が、それぞれの研究方法により、国文学科における学びを学生達に伝えようとした授業報告である。

学生達は、三回毎にめまぐるしく変わる担当者と授業方法にとまどいながらも、最後までほどよい緊張感を持続したようである。この授業を受けた学生たちが、それぞれに色々な感想を記してくれた。その内容は前節にも示したが、各授業後にも、さまざまな感想が聞かれた。最後に学生たちの反応をまとめておきたい。

まず、ほぼ全員が田辺聖子の名前を知っていたが、その作品を読んだことがある者は、意外にも少なかった。また、平成十八年にはNHKの連続ドラマ小説に田辺聖子をモデルとした「芋たこなんきん」が放映されたが、見た者は少なく、田辺氏の生涯について詳しく知る学生もほとんどなかった。そのせいか、年譜と自伝小説に興味を持つ者が多く、いかなる境遇にあつても「夢」を持ち続けた強さと、前向きに生きる姿勢に感動し共感を持ったという感想が聞かれた。

また、古典文学に興味を持つ学生が田辺氏の古典小説に興味を持つことは予測できたが、古典は苦手だしんきくさいと思っていた学生たちが、現代文学と同じように面白いと気付いてくれたことも特筆すべき感想であろう。大阪弁による敬語表現が面白かったという学生もいた。ユーモアにあふれた大阪弁を見直したという素朴な感想も聞かれた。文字を形よく書くだけでなく、言葉の意味に共感しながら自由に書く面白さを体

験し、書道に対するイメージが変わったという感想をもった学生も多かった。戦争の悲惨さを、具体的な作業や爆弾の傷跡の見学によって身近に感じたという学生もいた。

複数の教員による多彩な内容を学ぶという授業形態については、ほとんどの学生が有意義であつたと好意的な評価を下してくれた。田辺文学館の見学や、クラスの友人達との交流や討論も楽しかった、楽しく学べてとてもよかった、と。この授業を通して、文学を「読む」ことの意義のみならず、文学をクラスで学ぶ楽しさを伝え得たことは、何よりも嬉しい。毎回の授業内容に興味を持ち、何らかの発見や驚きを体験できたという感想を述べた学生が多かったことは、この授業がある程度の成果を収めたことを物語っていると見えよう。

担当教員は、学生に学ぶ意義を伝えるために、まず自らの研究と教育の意義を問い直さねばならなかった。何を目的に、何を教えるか、わずか三回といえども、毎日が試行錯誤の連続であつた。その過程で、文学を「読む」ことは、人間と、人間を取り巻く森羅万象を「読む」ことにつながってゆくのだと、文学教育の意義を再確認し合つた。おりしも、今年『源氏物語』千年紀にあたる。各地で行われているさまざまなイベントを通して、一古典作品が、いかに日本人の心と文化全般にわたって広く、しかも隅々にまで深く関わっているかに驚かされる。学生達には、「文学の読み方」における学びを起点として、人間社会における文学の有意義性を、卒業までの国文学科の学びの中で体得して欲しいと考えている。